

愛知教育大学加納誠司教授と大学院生として実践された現場の先生の研究を紹介します。

## 生活科授業における有効な「振り返り」の在り方を考える

生活科で子どもが気づきの質を高める「振り返り活動」の在り方についての実践研究です。低学年の振り返り活動は難しい。教師は、授業の終末に振り返りカードを配って、その時の学びの自己評価や感想を書かせたりします。よくある無機質な罫線を引かれただけのカードに、入学間もない子どもは思考が向かうだろうか？ある程度の文字量で埋められたとしても、体験と表現の往還をせずに、知っている文字を羅列しているだけでは生活科の目指す振り返りとは言えません。子どもが学んだ事実から自己の成長を実感する振り返りとは何か？それを表現するための有効な表現活動とはどんな方法か？そんな振り返り活動の在り方に挑んだ実践です。

## 「振り返り」を点から線へ 物語として感動体験を積み重ねていくことで事故の成長を実感する

### (1) 学習カードは絵本！アサガオが主役の絵本を作ろう！

子どもたちが種をまき、アサガオの栽培が始まったころ、先生は子どもたちに**一冊の絵本を読み聞かせ**します。その絵本の内容は、1年生の子どもたちと同じ年頃の女の子が種をまき、植物を育てているとその種がしゃべり始め、女の子とともに物語が展開されていくという話です。クラスの子どもたちは物語に出てくる種と自分が育てているアサガオの種と重ね合わせて想像を膨らませていきます。すると、今、土の中にいる種がなんて言っているのか聞いてみたくなったのです。先生は、すかさず真っ白な八つ切り画用紙を子どもたちに配り、アサガオ絵本の1ページ目の制作が始まったのです。

#### ポイント

- ・教師が「こうしましょう。」ではなく、絵本を読むことで、自分たちもアサガオと話してみたいと思わせる。
- ・アサガオはすぐに会いに行けるよう身近な場所に置くことで表現力を助長する。(環境設定)

#### めざす子どもの姿

- ・「めがでうれしい。もうわたしたちはもうたねじゃないよ。もうめになったよ。」と芽が出たとき、待ち望んでいた子どもの気持ちが表されている。(発芽した時の感動)
- ・自分のアサガオを傍らに置き、心の中で会話を楽しみ、絵や文字で表現する。

### (2) アサガオ絵本に自分が登場 アサガオと自分との対話が始まった！

つるが伸び、つぼみができたころ、明らかに子どもたちのアサガオ絵本の表現に変化が生じます。アサガオが主役の物語に、新たな登場人物が出てきたのです。それは、アサガオを育てている自分自身です。開花したころにはクライマックスに達します。大輪の花は、自分に向け成長した理由や感謝の言葉を語りかけます。それは空想ではなく、このプロセスを通じた学びの事実、自分の良さや成長なのです。

#### ポイント

- ・理科の学習ではないので、子ども自身が登場するところからアサガオとの関わりを評価する。(自分のよさやがんばりへの価値づけ、アサガオへの愛情表現など)

#### めざす子どもの姿

- ・「やったあ。ぼく、がんばって大きくなったよ。〇〇さんが水やりしてくれたり、草抜きしてくれたりしたおかげだよ。ありがとう。」と成長の感動と感謝の言葉が示されている。
- ・「葉っぱの数も増えてきたよ。」「わたしのせと同じぐらいになったよ。」と生長の過程やアサガオと自分の身長と比較などが示されている。



### (3) どこまでも続くアサガオと子どもの物語！

個々で取り組んできたアサガオ絵本の単元は、2度目の栽培が始まるころ、学級のみinnで作品を見合う授業を行いました。場所は体育館、これまでは自分の席の限られたスペースで広げていた物語が、折り目を気にせず一つの線としてつながり、その長さはそのまま自己の成長の実感に比例していきます。友達同士絵本を見合いながら、アサガオとのエピソードを共有したり、がんばったことをほめてもらったりしながら、次への物語の展開へと続いていくのです。

#### ポイント

- ・個々で実感した自分自身のよさや可能性がクラス全体に共有されている。

#### めざす子どもの姿

- ・「アサガオさんの気持ちがよくわかるよ。」「この続きが読みたい。」と誰もが自分の学びを肯定的に受け止めているので、安定した気持ちで前向きに友達のよさやがんばりを伝え合える。

## アサガオと自分とが十分に自己内対話（メタ認知）できるような時間と空間を保証する

「振り返り」カードに記述してある内容は、自分の学びを正しく認知した事実を表現することが大切です。本実践では、アサガオ絵本に没頭しているとき、自分がアサガオにどうかかわってきたかを思考している場面がそれにあたります。ならば、子どもにとって意味のある充実した体験から気づいたことを振り返るには、授業の残り5分では足りないし、5行の罫線に文字を埋めることとも違うような気がするのです。しっかりと学習対象と向き合えるような時間と空間を保証し、思わず書きたくなるような、後で読み返したくなるような学習カードを工夫することが求められているのです。その際に留意しなければならないのは、その学習対象が、子どもにとって表現するに値する特別な存在になっていることです。クラスの子どもは、自分が育てている身近な植物にすーっと心を寄せていき、アサガオと自己内対話を楽しみ、絵本として表現することで自分の学びを肯定的にメタ認知していったのです。

#### ポイント

- ・アサガオと対話を繰り返していくことで、気づきの質は自分の成長まで高まっていく。

## 「子どもの思考で授業を創る」ことで、生き生きと自分のよさや可能性を表現することができる

絵本から入る導入も、アサガオ絵本をかきたいという意欲を示したときも、子どもが学びのプロセスにおいて生じた思いや願いで授業は展開されています。2度目の栽培が始まったときでさえ、先生は、子どもの「なぜ、アサガオを育てたのにまたアサガオが出てきたのだろう？」のつぶやきを取り上げ、子どものつながりで単元を構成していきました。

下に示した子どものアサガオ絵本の記述からは、充実した体験から様々な気付きを得て、思考を巡らせ絵本に表現していくと、最終ページには自分自身のよさや可能性を生き生きと表現する姿があるのです。つまりこの物語の本当の主役は、自分自身であったことに気づいた姿ではないでしょうか。「子どもと創る授業」の本質に出会えたような気がします。



「わたしは、すごく がんばって いろんな あさがおをしることができました。わたしは、しょくぶつ 花を そだてるのが すきに なりました。さいしょは だいじょうぶかなって おもったけど、あさがおは かわいい。あさがお 大好き。いつも そだってくれてありがとう。これからも いっしょだよ。 また そだてるよ。」

絵は省略